

台湾のコオロギ相撲

相坂 耕作

はじめに

コオロギ相撲は中国の唐代に始まり、宋代に広まり、明・清の時代に盛んになったコオロギを格闘させる賭博で、宮廷遊戯の一つです。いわば闘牛、闘犬、闘鶏などと同じギャンブル性の強い遊びであり、闘蟋(とうしつ)と中国では造語でよばれています。上海の古老によると「冒険家の楽園とよばれていた時代、多くの外国人はジャズやダンスを楽しんでいたが、我々中国人はコオロギの遊びしかなかった」ともいっています。映画「ラストエンペラー」で皇帝溥儀が丸い壺に虫を入れて可愛がるシーンを覚えておられる方もいるでしょう。映画ではキリギリスの1種が見られましたが実際にはコオロギを飼育する壺なのです。さて、中国の闘蟋についてはインセクトarium誌の1992年9月号に三橋淳・方向両氏により詳しく報告されていますのでご覧いただくとして、ここでは中華民国台湾省での闘蟋について紹介しようと思います。台湾にもコオロギ相撲があるのは、すでに故松浦一郎著(1989)による「鳴く虫の博物誌」により、松浦氏自身が台湾出身者からの見聞を発表された報文が載っており、おおまかには知っていました。しかし、これは子供による闘蟋であり、台湾へよく訪れている筆者は、機会があれば是非本

式の闘蟋を見てみたいものと常々思っていました。ところが筆者が4年前に訪台したおり、中華民国台湾省の蝶研究の権威である陳維寿氏にお会いした際、台南地方にはいまもコオロギ相撲がのこっているはずと聞いており、訪台の機会をまっていた。ようやく平成7年7月8日より4日間訪台する機会に恵まれ、早速友人の周英勇氏に連絡、台南市へ連れて行ってもらうことになりました。

台南市へ

初めて台湾へ行きだしてからもうパスポートは4冊目となっており、もちろん訪台は2ヶタを越してしまっています。今回訪問する台南市は2度目ですが、過去に台北、基隆、淡水、宜蘭、新竹、花蓮、台中、嘉義、台南、高雄など主要な都市を回ってきました。しかし今まで闘蟋はどの都市でも見ることも聞くことも出来ませんでした。陳維寿氏にお聞きしてから今回、筆者の下調べで、いまも嘉義市か台南市でコオロギ相撲が見られるのではないかとの期待感を持ち、古都台南へ出発したのは台北到着日の翌日(1995.VII.9)深夜の1時30分(日本時間2時30分)でした。夜行バスは早朝6時ころ台南駅(写真:1)に到着。同行は愚息と周英勇(台北動物園胡蝶館職員)氏でした。



写真: 1 早朝の台南駅



写真: 2 サングラスを掛けた犬

バスの到着が早いので朝一番の屋台で朝食をとることになりました。台湾粥と共に肉料理ができましたが、脂ぎったものは朝から筆者は口にあわず、多く残しました。しかし息子と周氏は口にあつらしく全部食べていました。屋台のそばの光景ですが、台湾の人は陽気な人が多く、屋台のそばに駐車していたオートバイに腰を掛けさせた犬にサングラスをつけさせているのには一笑了しました(写真：2)。朝食後、顔を洗っていないので有名な観光地である赤嵌樓にて洗顔し休憩していると、その付近に多くの人たちが集まり太極拳をやっていました。時間もたち、古都の街を歩いても一向に鬮蟋などしている気配はないし、人に聞いても知らないといひます。案内の周氏も困りはて、タクシーにて観光地の安平古堡(ゼーランジャ城)へ行くことになりました。ゼーランジャ城というのは、オランダ人が台湾を占領統治していた時代の要塞の跡で、台南市を訪れた観光客が必ずといっていいほど足を伸ばす場所です。安平古堡の通りの前には、日本でお馴染み邱永漢氏の収集した台湾独特の民芸品や生活道具が数多く陳列された台南市永漢民藝館があり、一度も見ていないので開館までの暫くの間、観覧するため時間待ちすることになりました。しかし、あまりにも開館までの時間が長いので先に安平古堡を観光し、観光者にコオロギ相撲を聞いたことがないか聞くことにしました。すると一人の人がこの付近でやっていると教えてくれました。

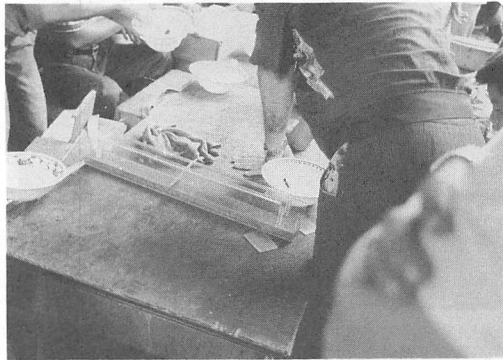
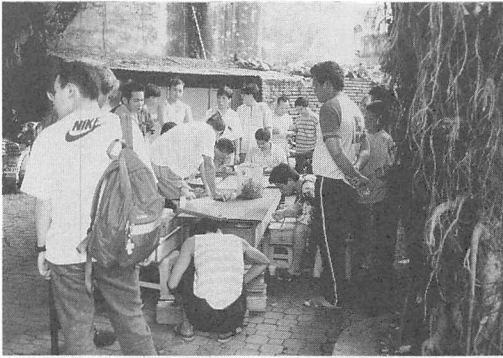
コオロギ相撲を見るまで

周氏が観光者から聞いた説明によると、この付近の旧街での日曜日にやっているとの事でした。永漢民藝館見学を後まわしにして、早速その現地へいってみましたが全くコオロギ相撲をするような気配はないのです。いろんな人に鬮蟋について聞いてみると、ほとんどが没有(メーヨー=ない)なのです。ただ不思議なことに、やたらと物陰からコオロギが鳴いているではありませんか。そのうちある人がやっとなら教えてくれました。午前11時ごろになるとこの近くにあるガジュマルの大木付

近に集まってきてコオロギ相撲(鬮蟋)をするというのです。冷静に考えると賭博なので、特定の人しか分からないようにする必要があり、もちろん公認されたものでもありません。警察(公安)に知られるとまずいでしょう。鬮蟋開始までの時間に台南市永漢民藝館にて時間をつぶすことになりました。展示品は結構筆者の好きな民俗資料が多数あり、充分楽しめました。この永漢民藝館について少々触れてみると、邱永漢氏が6年間にわたり民芸品を蒐集したものが3,000点以上にもなり、公開したほうが意義があるとのことで台南市長に相談。もし、市政府がしかるべき場所を提供してくれたら全部寄付してもよいと申し入れ、市長がゼーランジャ城の真ん前にある、もともとオランダ屋敷の跡で最近まで使っていた安平区公所の跡を提供し、昭和54年(1979)1月1日のオープンで民芸館としたものです。邱永漢氏は、折角寄付したものが万一、粗末に扱われると困るから、管理委員会をつくって文句がいえるように条件をつけていると聞きます。日本の戦後と同じく、台湾でもちょうどその時期にさしかかり、古いものはガラクタにされ新しいものが称赞される時代となっていたからです。残念ながら筆者のみたい昆虫に関係する民俗資料はすみずみまで物色しましたがありませんでした。

コオロギ相撲の開始

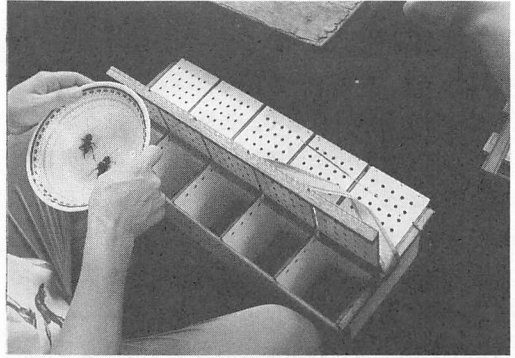
さて、いよいよ午前11時ころになってきました。会場となる場所に戻ると、各方面から単車がやってきてたちまち人だかりとなりました。その手には男たちが大きな木箱を持っています。会場は旧い街並みの一角で少し広い空き地となっており、かたわらには大きなガジュマルの木があり気根にはおまじないのお札が多く差し込まれています(写真：3)。おそらく鬮蟋でお金持ちになれるよう願ったお札もあると思われます。そのそばにある古い床机(しょうぎ)を会場の真ん中に据え、鬮蟋場が設営されました。おまけに中華の昼食や飲物が取れる屋台も準備されており、試合の前に食事をする人もおれば、合間に口を動かす人などさ



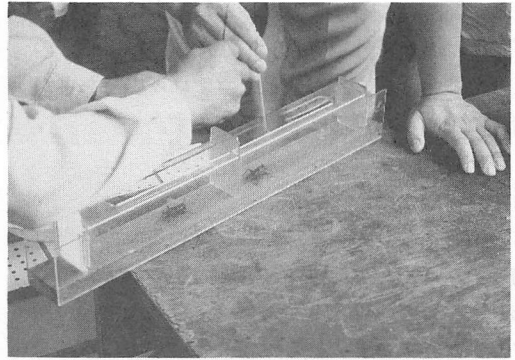
左上 写真：3 闘蟋会場 かたわらには大きなガジュマルの気根が

左下 写真：5 斗格(土俵)

まざまです。そしていよいよ闘蟋が始まりました。闘蟋に使うコオロギはフタホシコオロギ(クロコオロギ)で、中国のように壺には入れず、板でできた仕切つきの飼育器(写真：4)から取り出しています。そして、コオロギ(選手)2頭をラーメン鉢のようなものに入れ、事前に選手を興奮させるのです。その方法は鉢を前後させつつ上下させ、選手を宙に放り上げ、これを数回繰り返す(写真：4)のです。その内にどちらのコオロギが対戦させるのにふさわしいかどうか見くらべているのです(これは松浦一郎著の「鳴く虫の博物誌」による「左の手のひらにのせ、すかさず右手で左手の手首の辺りを打つと、コオロギは反動で宙に放り上げられ、落ちてくるところを再び左の手のひらで受け、また手首を叩いて放り上げる。これを3～4回繰り返すと興奮し、向かい合わずと闘い始める」とは少々違う点です)。すると選手はやる



右上 写真：4 飼育器と鉢



右下 写真：6 “くすぐり棒”で選手を興奮させる

気を出し、そして持ち主二人で同時にこれをやる。興奮の度合いのいい方を品定めをして格闘させています。選手のフタホシコオロギは中国の闘蟋で使うツヅレサセコオロギのように体重を計るような面倒なことはせず、すべて全級制です。斗格(土俵)は(写真：5)のようなアクリル製のもので手造りでした。細長くできており、上部には蓋がありません。

土俵の両端から選手を入れ、釣竿の先端に猫の髭をつけた、特有のくすぐり棒(写真：6)で選手の触角や体に触れ興奮させていくのです。お互いに興奮したところに土俵の真ん中にある仕切り板を上へ外し格闘させるのです。選手は土俵の中で顔が合うと威嚇しあい、キリキリと鳴き声を発する。そこを土俵の上部の間からくすぐり棒で再び触角や体に触れるとますます興奮し、お互いに体を前後にゆすりながら口を大きくあけて噛みつこうと

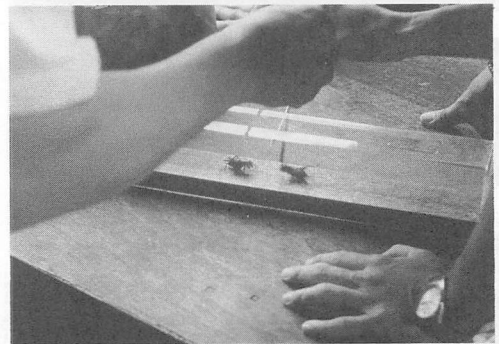
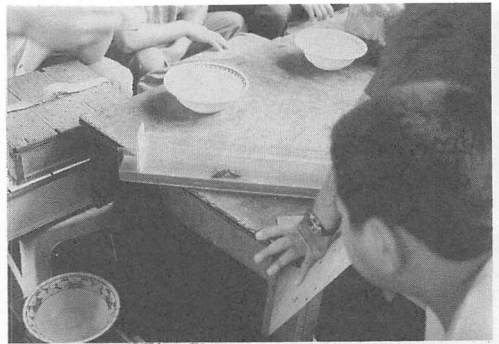
します(写真：7)。約20秒くらいの格闘でしょうか(写真：8)、やがて一方がくると回って逃げ出したら勝負が決まります。当然逃げたほうが負けになります。勝った選手は勝ちどきをあげ興奮しています。その持ち主もニコニコ顔で周囲を見わたします。負けた選手の持ち主はその選手を、たちまち海苔の空き瓶のような容器に入れます。つまり廃棄処分とするわけです。そこで筆者は負けた選手を標本用に10頭ほどもらって帰りました。彼らに聞くとところによると、これら選手のクオロギたちは全部野外で採集してきたものであるとのことでした。もちろん勝ったクオロギの持ち主が賭けた金を手にすることは当然です。

クオロギの種類

台南のクオロギ相撲に使われているクオロギは、前述のフタホシクオロギ *Gryllus bimaculatus* であり、クロクオロギともよばれる種類です。東南アジアからアフリカにかけての暑い地方に広く分布している種で、日本では南西諸島に生息しています。最近日本でも多く飼育され、熱帯魚の餌として使われている種類です。筆者もクチキクオロギと共にこのフタホシクオロギを飼育していますが、簡単に飼えます。どちらかというに見馴れているエンマクオロギと比べやや大きく、またクチキクオロギほど立派な後肢ではなく、ずんぐりした体です。全体は艶のある黒色ですが翅の基部に黄色の斑紋があります。個体によっては黄色がかったものもありますが、こんな個体はクオロギ相撲は弱いそうです。

写真撮影の許可

筆者は是非ともこの闘蟋の現場を写真撮影したいと願ったところ、取り締まりの関係もないし、いわゆる外国人であるがゆえ好意的に撮影の許可をさせてもらいました。残念ながらお金のやりとりだけは自主的に撮影はしませんでした。トラブルに巻き込まれては大変だからです(写真：9)。



上 写真：7 仕切り板を上へ外し格闘する瞬間

中 写真：8 格闘しているところ

下 写真：9 闘蟋正面写真

闘蟋の道具を譲ってもらう

筆者の私設資料館「播磨昆虫民俗資料館」には、中国の闘蟋で使う道具類や飼育に使う諸道具、またクオロギに関する研究書・文献などを保存しており、さらに、これらに加えて台湾の実際に使っている道具類を保存しておきたいので是非譲ってほしい旨を周氏にお願いしました。すると、闘蟋をしている人から、これらに使っている諸道具類は、台南氏永華路の某氏が製造しているとのこと

を教えてくださいました。

電話番号も聞きだし、お家へ電話をしましたが見つかりません。しかし、いま暫くすると本人がこの場所へやってくるということがわかりました。やがて少々時間が経ち某氏がやってきました。お金での譲渡をお願いするが、残念ながらいまは道具類は没有とのこと。季節的に作成するものらしいです。どうしても必要な資料なので再度周氏に伝えると、周氏は個々に交渉にあたってくれました。まず周氏は飼育箱のある人から手に入れてきてくれました。木製で外側は穴あきベニア合板を加工したもの、また内側はアルミニウムのやや厚い板が張られてあります。内部は10個の部屋に分かれており、選手を1頭ずつ隔離し搬入する道具となっています。斗格(土俵)はあと1時間位すると闘蟋が終わるので分けてもよいとの事。すこし時間待ちすることになりました。闘蟋終了後たしか日本円の1,000円くらいで譲ってもらったように記憶しています。この土俵は透明のアクリル板を加工したもので、長さ60cm幅8cmのもので中央で引き上げることのできる黒っぽいアクリル板がはめ込んであります。中国で使用している卵形の土俵とは全く違うものです。それから周氏がどこからか、くすぐり棒を手に入れてきました。これは猫の髭を使っているので各自手造りだと聞いたものです。また猫の髭が手に入りにくいと譲れないとも聞いた代物でもありました。筆者のあまりにも道具の入手に力を入れている熱心さに感動したのか、現地の会場で闘蟋をしているパンチパーマをかけた若い遊び人風のお兄さんがやってきて、こわい顔のわりには協力的で、自分が持っていたと思われる猫の髭を、全く言葉の通じない筆者に猫の真似をして「ニャオー」と鳴き、これは猫の髭であることを示して筆者に恵与してくれました。そしてこの髭を釣竿の先端部分を切り取り、そこへ猫の髭を数本取付け細工し、テグス糸で縛ってくすぐり棒を作成するのだということを身振り手振りをまじえて台湾語で教示してもらい、何とか理解できました。帰国後、早速作成してみました。

おわりに

今回、訪台の主目的の夜間採集ができなかった代わりに闘蟋の本番がみられるというラッキーな旅行となりました。たまたま日曜日に現地へ行ったのと、安平古堡の観光地で闘蟋を知っていた観光客がいたことなどが重なり運がよかったのだと思います。そのうえ、忘れてならないのは周英勇氏の案内があつてこそ見聞できた旅でありました。旅行終了の当日、超ベテラン現地(台湾)案内人に闘蟋の質問をしましたが、タイにはあるが台湾ではないとの返事でした。現地案内人にも知られていないコオロギ相撲を見られたのかと思うとあつい思いになりました。今度台南市へ行く機会があれば再度同地へ出向き、今回の訪問で聞けなかった採集したフタホシコオロギの飼育法や餌の種類、現地での採集法を見てみたいものです。

<主な参考資料>

- 邱永漢(1981) お金の使い方, 中央公論社, 191-195.
 松浦一郎(1989) 鳴く虫の博物誌, 文一総合出版, 70-82.
 三橋淳・方向(1992) 中国の闘蟋蟀, インセクタリウム, 29(9):12-17.
 芳野未央・立川周二(1996) バリ島の「コオロギ相撲」見聞記, インセクタリウム, 33(9):12-15.